

教育評価という営みとテクノロジー

上智大学 奈須正裕

教育評価(evaluation)という表現の本来的な意味

- ▶ 評価論は目標論の裏返し: 評価論が目標論を実質的に規定する
- ▶ 1930年代にラルフ・タイラーがカリキュラム編成論の中で提起
- ▶ 教育評価: 教育活動の全体を動的・組織的に反省・改善する営み
- ▶ カリキュラム編成の4要素: 目標論、内容論、方法論、評価論
- ▶ 評価論: 目標論・内容論・方法論が思惑通りの成果を挙げているか

- ▶ 評価論は、子どもの学習評価と共に、それを介した授業評価・カリキュラム評価でもあった・・・「指導と評価の一体化」「カリキュラム・マネジメント」の考え方をすでに含み込んでいた

学習指導要領改訂の方向性

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

目標論

何ができるようになるか

評価論

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

内容論

何を学ぶか

どのように学ぶか

方法論

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共（仮称）」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない。

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得
など、新しい時代に求められる
資質・能力を育成

知識の力を削減せず、質の
高い理解を図るための学習
過程の質的改善



図1 学習指導要領改訂の方向性(中央教育審議会「答申」補足資料2016年12月21日より)

この図に「評価」の文字はないが、「カリキュラム・マネジメント」の中に、本来の意味、すなわち目標論・内容論・方法論が十全に機能しているかを子どもの事実で確かめ、よりよく機能するよう不断の反省・改善を行い続ける営みとして位置付けられている。「カリキュラム・マネジメント」が目標論・内容論・方法論に囲まれた中心に描かれているのも、そのことを表現している。

今回の学習評価改善の基本方針

- ▶ 総括的評価中心から、形成的評価重視へ：評価はコミュニケーション
- ▶ 総括的評価と形成的評価の混在・混乱をどう避けていくかが課題

形成的評価の重視

- ▶ 「学期末や学年末などの事後での評価に終始してしまうことが多く、評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない」
・・・「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」
- ▶ 「評価という仕事の負担感の大部分は、総括的評価(最終的な学習成果の判定(評定)のための評価)と形成的評価(指導を改善し子どもを伸ばすために行われる評価)とを混同していることによる」
・・・石井英真「指導要録の改善と取扱いのポイント」田中耕治編『資質・能力の育成と新しい学習評価』ぎょうせい、2019年、64頁
- ▶ 総括的評価:一律での評価や厳密な評価が必要になることも多い
- ▶ 形成的評価:気になる子どもに問題がないか確認するのが中心。評価情報の精度も、学習の形成や指導の改善につながる程度で十分

形成的評価のために取られた情報は 総括的評価には用いない

- ▶ 単元の冒頭で「課題とうまく向かい合えていない」「活動状況が散漫で集中が持続しない」といった子どもが見つかったら、丁寧に対話し、その子にあった課題を追加で設定したり、一緒に活動したりする。それが奏功してその子が課題に没入し、挑戦的で創造的な活動を展開する中で単元が終了したなら、その子の「主体的に学習に取り組む態度」は決してCにはならない

コミュニケーションとしての評価

- ▶ 評価がもっぱら一方向的で確定的な「宣告」としてなされるのは不自然
- ▶ もっと双方向で交わされる可変的「コミュニケーション」として計画・実施されるのが望ましい

- ▶ 形成的評価については、すでにコミュニケーションとして実施されている
- ▶ 子どもの姿を「不十分」と感じたなら、それを子どもに告げ、対話してみる
- ▶ 対話の結果、教師の見とりとは異なっていることもある
- ▶ 対話の結果、やはり「不十分」と感じたなら、それを告げ、子どもと今後の方向性について相談
- ▶ これら教室での日常的なコミュニケーションを形成的評価として自覚し、記録に残すと共に、自身の判断やその結果を省察する
- ▶ → 子ども理解の促進、よりの確な評価の実施

評価に関する子どもへの情報開示

- ▶ コミュニケーションとしての評価のためには、評価の観点や評価の規準・基準について、あらかじめの情報提供が不可欠
 - ▶ 「どのような方針によって評価を行うのかを事前に示し、共有しておくことは、評価の妥当性・信頼性を高めるとともに、児童生徒に各教科等において身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージをもたせる観点からも不可欠であるとともに児童生徒に自らの学習の見通しをもたせ自己の学習の調整を図るきっかけとなることも期待される」
- …「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」3の(3)

評価を支えるテクノロジーに関わる気がかり

- ▶ テクノロジーは評価に対して有用
- ▶ 評価の側から見ると、その有用性は極めて限定的で局所的

- ▶ データは子どもの学習に関する事実・・・だけど、その一部・一面
- ▶ データになるもの、なりやすいものへの偏り・限定
- ▶ とりあえず、そこから始める・・・とりあえずにならない危険性
- ▶ 評価論は目標論を実質的に規定する・・・データが目標論を規定する

- ▶ データの取得・保管・利用に関わる人権問題・個人情報問題
- ▶ 常にデータを取られる状況が教室での学びにもたらす影響

手段としてのテクノロジーを使いこなす主体

- ▶ 「個別最適化された学び」→「個別最適な学び」
- ▶ 最適化に関する判断の主体は子ども＋教師・・・コミュニケーション重視
- ▶ 評価でも、子どもが主体になっていく
- ▶ 子どもが自分の学習過程・成果を、適宜メタ認知的に把握し、表現する
- ▶ 子どもが主体となって進めるポートフォリオ評価を支えるテクノロジー